メッセージ

池　田　大　作

今、胸に迫り来るジョン・デューイ博士の言葉があります。

「この世には、善と悪の混合が存在する。もし少しでもそれらを理想的な目標に示される善の方向へと再構築しようとするなら、それは絶えざる協調的な努力によって行われなければならない」と。

これは、敬愛してやまないジム・ガリソン博士が受け継がれ、私に伝えてくださった信条であります。まさしく、その「絶えざる協調的な努力」を光らせゆく「世界市民教育シンポジウム」の開催に当たり、創価大学にご参集いただいた諸先生方に、私は創立者として、満腔の感謝と敬意を表します。

折しも、この9月、国連では「教育変革サミット」が行われました。その声明で強調されているのも、SDGs（持続可能な開発目標）を達成する上で教育が果たす役割の重要性であり、急速に変化する世界に備えるために教育を革新する必要性にほかなりません。

時宜を得た本シンポジウムのテーマは「学びを生活に取り戻す」であります。デューイ博士も、また、博士の教育哲学に深く共感する、創価教育の創始者・牧口常三郎先生も、「生活」という大地に根を張った「学び」が持つ無窮の力に信頼を寄せられました。今、揺れ動く国際情勢にあって、「生活」の現場それ自体が幾多の試練に曝されております。その〝挑戦〟をあえて引き受ける〝応戦〟から、「世界市民教育」の新たな地平を開いていきたいと思うのであります。

第一に、学びの勇気による創造的生命の成長であります。

一九一九年の来日の折、デューイ博士は、知性の「不断の形成過程」において、「絶えず油断なく結果を観察する態度」並びに「素直な学習意欲」とともに、「再適応の勇気」の重要性を挙げられました。

「真理の松明」と題する博士の詩では「昔もえていた光は／未来への道を今、てらしはしない」と指摘されております。

それは、まさに現下の世界の様相であり、だからこそ、博士が「くらやみの中から少しずつ／

Daisaku Ikeda（創価大学創立者）

今ゆく道をまなぶのだ」「みずからの炎の矢が／旅路をおおう深い霧をきりさくまで」と呼び掛けた開道の勇気を、いやまして燃え上がらせたい。

わが先師である牧口先生は、日本の軍部政府に弾圧された獄中でも、哲学書の精読を重ねるとともに、尋問に対して毅然と「国家悪」の時代を超えた「理想社会の建設」の展望を語っておりました。こうした先哲たちが示した「学び抜く勇気」そして「道徳的勇気」という究極の非暴力の力を、世代から世代へ継承し練磨しゆくなかにこそ、人類の新たな創造的生命の成長を照らす希望の松明が輝くのではないでしょうか。

第二に、対話を貫いて学び合う喜びの連帯であります。

デューイ博士も牧口先生も着目されていたように、「生活」は即「対話」の広場となり、「対話」は即「学び合い」の連帯となります。とりわけ、インターネット等の発展により、「対話」の形態は、より自在に、より広範となっております。

ゆえに、地域社会にあっても、また国際交流にあっても、対話の精神を一段と大切にして、多彩な他者との差異から学び合い、創造的な統合を織り成すチャンスと捉えたい。

「対話」即「学び」の力を信ずることは、人間生命に内在する普遍の善性と可能性を信頼することでもありましょう。この信頼を貫いてきた一人として、私は、仏典に「自他共に智慧と慈悲と有るを、『喜』とは云うなり」と説かれる喜びの連帯を広げ、平和への更なる波動をと心に期するものであります。

第三に、忍耐強き世界市民の幸福哲学の確立であります。

私が心に刻むデューイ博士の信念に、「人間は、苦悩のなかにあっても、幸福をみいだすことができる。もしも、勇敢で平静な精神をもつならば、不愉快な経験が続くなかでも、満ちたりて快活でいられるであろう」とあります。

博士は、不安で問題の多い世界を生き抜いてきた人生哲学は、「辛抱強く頑張るところにある」とも述懐されています。

思えば、大歴史家のアーノルド・J・トインビー博士に、私が次代の青年へのアドバイスを求めた際の答えも、一言、「忍耐強くあれ」でありました。

多難な二十一世紀の命運を担い立つ、偉大なる使命の若き世界市民に、忍耐強く、しかも勇敢にして快活なる幸福哲学を託したいと私は願ってやみません。そして尊敬する先生方と共々に、地球民族の不屈なる「価値創造の力」を薫発しゆくことを祈り念じて、メッセージとさせていただきます。

二〇二二年十月二十二日　創価大学創立者　池 田 大 作